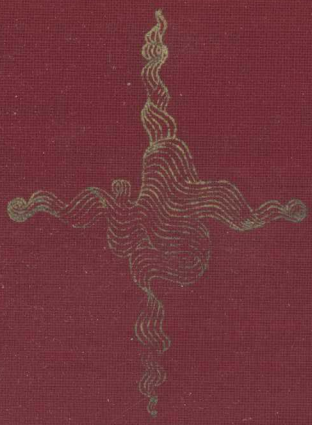

江戸川乱歩全集 13

# 探偵小説四十年（上）

江戸川乱歩全集13
探偵小説四十年(上)

昭和四十五年四月十日　第一刷発行
昭和四十七年四月十五日　第二刷発行

著　者　江戸川乱歩
装幀者　伊藤憲治
写真レイアウト　村山豊夫
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話　東京(945)一一一一大代表　振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大光堂
七九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。　© Ryū Hirai　1970

0393-225936-2253 (1)　(文2)

# 目次

自序 5
処女作発表まで 13
余技時代 36
探偵作家専業となる 49
東京に転宅 96
放浪の年 143
「陰獣」を書く 169
生きるとは妥協すること 187

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

虚名大いにあがる　212
最初の「江戸川乱歩全集」　225
二回目の休筆宣言　259
精神分析研究会　280
小栗・木々の登場　297
甲賀・木々論争　335

# 自序

江戸川乱歩

この記録体自伝は「探偵小説三十年」の表題で、昭和二十四年十月号の「新青年」から連載しはじめ、間もなく同誌が廃刊になったので「宝石」誌に移し、中途で「探偵小説三十五年」と表題を改めて、昭和三十五年五月号まで、あしかけ十二年にわたって書きつづけたのを、一冊の本にまとめたものである。本文は昭和三十一年までで終りにしているが、その後現在に至る四年余りについても、最後の章に、ごく主な出来事を要約して書き加えておいた。

私が処女作「二銭銅貨」を執筆したのは、「新青年」に発表される前年の大正十一年だから、そこからかぞえると、雑誌の連載を終った昭和三十五年は、三十九年目に当り、この本の出版される昭和三十六年は、まさに四十年目に当る。そこで、三たび表題を改めて「探偵小説四十年」としたのである。この四十年のあいだに、随筆や少年ものを別にすると、私が小説らしいものを書いた期間は驚くほど少なく、合わせて十数年にすぎないであろう。まことに気力の乏しい作家生活であった。

私は日記が書きつづけられない性分だから、自分に関する記録は何でも収集しておくくせがあり、新聞、雑誌の切り抜きなど丹念に保存して、その大部分は「貼雑帳」という大きなスクラップ・ブック数冊に貼りつけてある（本書の扉に薄色で印刷した写真は、その貼雑帳の戦前の分の一冊である。横長で新聞紙半頁大）。この回顧録は主として貼雑帳の資料によって書いた、というよりも、鋏と糊でそれらの資料を貼り合わせ、そのあいだあいだに、自分の文章を書き加えたというのが正しいであろう。記憶力の極度に弱い私は、こういう資料でもなければ、とても長い回顧録など書けなかったと思う。しかし、考えてみると、すべてその当時の記事によってしるすというこの方法は、記事そのものの間違いは正し得ないにしても、筆者の記憶ちがいを防ぎ、できる限り真実に近い記録を残すという意味では、大いに取柄があり、この形式の回顧録もまた一つの行き方ではないかと思うのである。

本書の前半約五分の二（昭和八年度まで）は、私の還暦の年、昭和二十九年に、岩谷書店（今の宝石社）から「探偵小説三十年」と題して出版したものだが、宝石社の承諾を得て、同書の全部を本書に加え、首尾一貫したものとした。その「三十年」の序文の中に、私は次のように書いている。

「こういう回顧録は、殊に私のそれのように平凡なものは、老人の炉辺の自慢話に類し、話し手だけが面白がっている場合が多い。また、たとえ自慢話でなくて、卑下の言葉であっても、やはり一種の自己弁護、或いは裏返しの自慢話となり、いずれにせよ、いい気なものにちがいないのである。その感じを柔らげるためには、或いは逆説を用い、或いは諧謔に隠れるのを普通とするが、私はそういう手管が下手なので、思い出すままを、正面から素直に、いわば愚直

に、しるす方法を選んだ。自慢も卑下も真正直な告白なのである」

本文の分け方は、記事の繁簡に応じて、一年または二、三年分を一括し、全体を二十四の大見出しに区分して、それぞれに多くの小見出しをつけた。大見出しはその年度のうちで、私にとって最も意味ある事柄を選んで表題とした。表題の下に年度をしるし、その下にその章を執筆した年を上、中、下期に分けて註記した。「今年」「昨年」「何年前」など時間的な記述は、すべてこの執筆当時を標準としているので、それの書かれた時期を明記しておかないと、誤解を生ずるからである。読者は各章の執筆年度を頭においてお読み願いたいのである。

この本の大きな欠点は、記録の繁簡よろしきを得ていないことであろう。十二年という長い年月にわたって執筆したので、そのときどきの気分によって、或る出来事はむやみに長く書き、或る出来事はごく簡略にすませているという不均衡が目につく。殊に戦後の記事は急ぎ足になって、日記の羅列や、その年の主な出来事の箇条書きばかりで、別項を立てて長く書いた部分が、だんだん少なくなっている。

これには理由があるので、執筆十年を越したころから、全体が一冊の本に収まらなくなることを顧慮しだしたこと（現在のこの分量でも、付録を加えて原稿紙二千五百枚に近く、一冊にまとめるのがやっとであった）、もう一つは、戦前の出来事は、新しい作家や読者諸君は知らないことが多いと思うので、詳しく書く興味もあったが、戦後の出来事は人々の記憶に新しい事柄が多く、そのわかりきったことを長々と書く気になれないということもあった。一方、一般読者の御存じないような、私の身辺の出来事が長文になったのも、その逆の理由によるものであろう。

殊に急ぎ足になったのは、大体昭和二十六年度あたりからで、その年の主な出来事の列記を多少詳しくして、別項を立てることをできるだけ少なくした。そこで、今度本にするときに、そういう項目書きのような部分を、少しでも読みやすくするために、項目のあいだあいだに、新しく多くの小見出しを挿入して、私が重きをおく事柄がどれであるかを明かにした。その結果、小見出しの記事は二、三行しかなくて、すぐ別の記事に移っているような場合もあり、甚だ不体裁なものになったけれども、これは大目に見ていただきたい。

雑誌に連載したときは、各年度の本文の中に「作品と著書」の表を挿入したが、それらは無味乾燥な表題列記にすぎないので、やはり本文を読みやすくする意味から、各年度の「作品と著書」の目録は、全部本文から削って、巻末付録として一括して掲げることにした。そのために、表を削ったあとの文章のつづきがおかしくなったところは、できるだけ直しておいたが、まだその痕跡をとどめた箇所が、いくらか残っているかもしれない。

さて、本にするために読み返してみると、ずいぶん不用な記事が目についたので、それらは思いきって削除した。一方、書き加えなければならない事項もあり、全体にわたって多くの「追記」や「後記」を挿入し、また、最後の「追記」と題する一章は、全く新しく執筆したものである。それらの新稿だけでも原稿紙七、八十枚に及ぶであろう。

個々の作家についての思い出話は、数人の例外を除いて、その作家の歿年の章に、作家名を小見出しとして書くという形式に統一した。そして、その項にはなるべくその作家の顔写真を入れるようにつとめた。しかし、個々の作家の記事は必ずしも一ヵ所にまとまっていないので、人名索引に太字で印刷した他の頁をも参照していただきたい。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本書の一つの特徴は、雑誌発表の当時に比べて（刊本「探偵小説三十年」に比べても）、はるかに多くの写真を挿入したことである。それらは記事の絵解きとして、また、若かりし日の作家たちや、故人の俤を偲ぶよすがとして、読者諸君の興味を増すだろうと考えたからである。一つには、写真の説明文によって、本文の簡略な箇所を補う気持ちもあった。

しかし、写真が多いといっても、総計百七十余枚にすぎず、まだ充分とはいえない。故人の写真は、遺族の方々にお願いして拝借したものが多いが、全体としては、私のアルバムに残っているものだけを入れたので、やはり不均衡をまぬがれない。ここにも写真がほしいなと思う箇所がずいぶんあるけれども、新聞、雑誌に印刷された写真からは製版できないので、私の手元にあるものだけを掲げるほかはなかった。なお、個人写真には限度があり、それよりも群像写真の中に珍らしい顔が見えるのだが、それを探し出す労を省くために、巻末に「写真人名索引」をつけて読者に便した。

以上でこの本について読者諸君の諒解を得ておきたい要点はつくしたと思うが、いつもの私のくせで、本にする際には、多くの時間を費して、できるだけ手をかけ、少しでも読みやすくすることにつとめたつもりである。

本書は、いろいろな欠点はあるにしても、ともかく作家としての私の生涯の記録なのだから、私自身にとって、大いに意味があることはいうまでもないが、同時に、同好の読者諸君にとっても、一生を探偵小説に終始した一人の作家の記録として、或いは多少の興味があるのではないかと思う。あえてこの書を、世の探偵小説愛好家の書架におくるゆえんである。

終りに、ほとんど利益を度外視して、進んでこの本を出版してくださった桃源社々長矢貴東

司君、また、この本の印刷中の面倒な仕事の一切を、人手に任せず、自から引きうけて努力してくださった副社長矢貴昇司君に、深謝の意を表するものである。

（昭和三十六年五月記）

初版本「探偵小説四十年」（桃源社発行）の自序を転載しました。

# 探偵小説四十年（上）

# 処女作発表まで

（この章昭和二十四年下期執筆）

## はしがき

私が処女作「二銭銅貨」を書いたのは大正十一年の夏（新青年に発表されたのは十二年春）だから、今年、昭和二十四年の夏で満二十七年になる。三十年には少し足りないが、この稿を終るころには、一層そこへ近づくのだから、あらかた三十年というわけで、「探偵小説三十年」という表題をつけた。

平凡社版「江戸川乱歩全集」の最終第十三巻（昭和七年五月）に「探偵小説十年」という回顧随筆を書き、新潮社版「江戸川乱歩選集」十巻（自昭和十三年九月、至十四年九月）の各巻末に続きもので「探偵小説十五年」を書いたが、いずれも正確に十年、十五年であったわけではない。新潮社本の場合は、本当は十六、七年に当るのを、それでは口調が悪いので十五年と縮めたが、この稿はそれとは逆に、二年余り延ばして、三十年と口調よくしたわけである。

「探偵小説十年」と「同十五年」のほかに、作家生活の思い出話のようなものには、随筆集「悪人志願」に収めた「無駄話」や、平凡社の全集第二巻に収めた「楽屋噺」などもあり、それらを合わせると、私はこれまでにも相当饒舌に回顧談を筆にしているわけで、この稿はそれらの繰返しになるおそれもあるが、そういう昔の随筆を読んでおられる読者は、ごく少ないことと思うから、繰返しになることを気にしないで、処女作以前からの、私の探偵小説履歴書というようなものを、ごく気軽に、あけすけに、そこはかとなく書きつけて行こうと思う。

実をいうと、私は西洋探偵小説史と日本探偵小説史の相当詳細なものを書き、いろいろな写真なども入れて二冊の厚い本を作りたいという野心を持っていて、その資料は日頃から心がけて集めているのだが、書誌学的に正確な遺漏のないものを作ろうとすると、非常に時間をかけなければならないので、軽々しく着手する気になれない。それより

もまだほかにやることがある。第一そんなことをはじめたら、小説を書く機会を全く失ってしまうかも知れない。私はまだ小説を書くことを諦めたわけではないのだから、それを妨げるような大仕事には、うっかり着手できないという気持なのである。

そこで、この二つの探偵小説史のうち、日本の探偵小説史に少しも手を着けないで終るような場合を考えると、その近代篇ともいうべき部分を、身を以て経験して来た私の思い出話をまとめておくのも、あながち無意味ではない。そのある部分は日本探偵小説近代篇の側面史というような意味を持つのだから、後年誰かが探偵小説史を書くような場合の、一つの参考資料となるであろう。そういう意味をも含めて、この稿を書きはじめるわけである。

## 涙香心酔

明治三十二、三年のころ（私は六、七歳であった。生れたのは明治二十七年十月、三重県名張町。本籍は同県津市にある）。父は名古屋商業会議所の法律の方の嘱託として毎日通勤していたが、やはり宴会などが多かったのであろう、父の留守の秋の夜長を、祖母と母とが、針仕事にも飽きて、茶の間の石油ランプの下で、てんでに小説本を読んでいるようなことがよくあった。そのころは貸本屋の全盛時代で、祖母はそこから借り出してきた講談本のお家騒動か何かを、母は涙香の探偵ものを好んで読んだ（私は母の十八歳のときに生れたので、そのころ母はまだ二十三、四歳であった）。私は二人が読書しているそばに寝ころがって、涙香本の、あの怖いような挿絵をのぞいたり、その絵の簡単な説明を聞かせてもらったりしたものである。しかし、そのころの私には、まだ探偵小説の面白味などはわからなかった。母も幼い私に探偵ものの筋を聞かせてくれたわけではない。

私が探偵小説の面白味を初めて味わったのは小学三年生のときであったと思う。算えて見ると、日露戦争の直前、明治三十六年に当る。巌谷小波山人の世界お伽噺の大きな活字に夢中になっているころで、私はまだ新聞を読む力もなかったが、生来小説好きの母は新聞小説を欠かさず読んでいて、私は毎日その話を聞かせてもらうのが一つの楽しみであった。

そのころ、大阪毎日新聞に菊池幽芳訳の「秘中の秘」が連載され、これが非常にサスペンスのあるミステリ小説で、母の好みにも叶い、私は毎日その挿絵を見ながら、母の話を聞くのを、こよなき喜びとしていた。「秘中の秘」の原作が何であるか、まだ調べていないが、古い型の怪奇探偵小説として可なり面白いもので、初めてそういう味に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com